

周手術期看護実習における看護実践能力育成方法の検討 —シャドーイング実習での学びと今後の課題—

石渡智恵美

帝京科学大学医療科学部看護学科

Evaluation of Training Methods for Nursing Skills in Perioperative Nursing Practice
— Analysis of Learning Experiences in Shadowing Practice —

Chiemi ISHIWATA

キーワード：周手術期看護実習、看護実践能力、シャドーイング実習、看護学生、学び

I. はじめに

医療現場では、医療の高度化、複雑化、重症化が進んでいるにも拘らず、在院日数が短縮化されている。看護基礎教育における実習現場でも、学生が受け持つ患者の高齢化・既往歴等の複雑化・重症化の傾向がみられ、術後受け持ち患者の集中治療室（以下、ICU）や高度治療室（以下、HCU）の入室を経て一般病棟に帰室するケースが増えている現状がある。こうした中で、臨地実習での看護経験は、看護学生の看護実践能力の育成に大きく関与する¹⁾ことから実習内容の充実が大きな課題となっている。

周手術期は、特に患者の状態が変化し、危機的状況からの回復過程を学習するため、学生も継時的に患者をみて看護を実践していかななくてはならない。そのため守田らや沖野らは、周手術期実習中の学生はストレスフルな状態である^{2, 3)}と報告している。その他の先行研究でも、臨地実習の様々な場面で、学生は戸惑いや困難を生じている⁴⁻¹¹⁾ことが示されている。

本学での周手術期看護実習は、3週間の実習期間に患者1名以上を受け持ち、術前・術中・術後の周手術期における看護過程の展開を学ぶ実習を中心に行っている。

周手術期看護実習は、看護基礎教育課程における実習の中で、3週間の一番長い実習期間となっている。そのため学生にとっては慣れない環境下に長期間おかれ、緊張感はピークに達すると考えられる。そこで緊張を最小限に抑え、周手術期看護展開に学生が慣れるように実習内容を検討することが必要である。

文部科学省は、看護学教育の在り方に関する検討会で、「臨地実習の場に卓越した看護職者のロール

モデルがいることが学生に良い影響を与える。中でも身体侵襲を伴う技術の実施は実践現場の経験を積んだ看護職者の責任であり、学生にケアの実践モデル、専門職者としての役割モデルとして機能してこそ臨地実習の意義がある。優れた看護が実践されている状況や卓越した看護職者の存在そのものが最良の教育となる¹²⁾と報告している。

そこで、看護職者のロールモデルを身近にみられるのは、看護学教育ではシャドーイング実習である。シャドーイング実習とは、一人の看護師の後に学生がついて、その看護実践活動を観察し学ぶ方法を指す。医学中央雑誌Web版にて検索した結果、「シャドーイング」、または「シャドゥイング」のキーワードでの検索結果は5件であった。基礎看護学演習でのシャドーイングでは、佐居らは、『学生は、「様々な看護場面を体験」することで、「講義と実践のつながりを実感」し、さらに「自らの成長を自覚」し、「モチベーションが向上」し、「実習に役立つ演習」であった¹³⁾ことを示した。また高下らが、統合実習でのシャドーイングにおける学生の学びとして、『「優先順位の判断」「限られた時間の中での効果的な時間の使い方」「予定された時間の使い方」「情報収集の仕方」「看護チームの連携」「医療安全」「感染予防」「患者への配慮」「見習うべき看護師としての姿勢」であった¹⁴⁾と報告しているが、成人看護学実習（周手術期看護実習）でのシャドーイング実習についての研究は少ない。

以上のことから今回、周手術期看護実習において看護実践能力育成のためにシャドーイング実習を導入したので、その学びと課題を明らかにし、今後活かしたいと考えた。

II. 研究目的

本研究は、周手術期看護実習における看護実践能力育成方法として、シャドーイング実習を導入したので、その実習での学びと課題を明確にし、今後の看護実践能力育成方法の示唆を得ることを目的とした。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

質的帰納的研究

2. 研究対象者

研究対象者は、A短期大学看護学科3年生で全領域実習終了後に同意が得られた79名を対象とした。学生の属性は、女性のみ。ただし、対象者の除外基準として、翌日手術予定の患者を受け持った場合は、受け持ち患者の看護を優先するため、シャドーイング実習は実施しないこととした。

3. データ収集方法

- 1) 調査期間：2012年5月～11月の成人看護学実習（周手術期看護実習）終了後。
- 2) 周手術期看護実習を経験した学生に成績評価後、無記名にした学びのレポートを設置した回収ボックスへ提出するように依頼した。

4. 学びのレポートの内容

- 1) シャドーイング実習で学んだ内容はどのようなものがありましたか。
- 2) シャドーイング実習を経験し、受け持ち患者看護に活かせることは何ですか。
- 3) 周手術期看護実習をする上でのシャドーイング実習の意味はどのようなことでしたか。

5. データ分析方法

分析方法は、上記の学びのレポート内容から個々の記述を一文脈単位とし、看護の学びに関する内容の意味のまとまりをコード化し、意味内容の類似性・相違性を比較検討しながら、抽象度を上げてサブカテゴリ、カテゴリを抽出した。質的研究でのコードはデータに則したラベルとし、サブカテゴリは同様の特徴をもつ中心概念、カテゴリとはサブカテゴリの類似した内容を集約したものを簡潔に表示した。データの分類には、信頼性を確認するために質的研究の経験をもつ研究者で分析し、結果の真实性を確保した。

IV. 実習内容

- 1) 科目：成人看護学実習 I（周手術期看護実習）
- 2) 開講時期：3年前期～後期〔3単位：135時間〕

(1) 実習目標

- ①周手術期・回復期にある対象・家族並びに関係者との援助関係を築くことができる。
- ②周手術期・回復期にある機能障害に着目し、フィジカルアセスメントができる。
- ③周手術期にある対象の発達課題、生活過程、健康状態（機能障害の程度・治療・予後）を相互に関連づけて心身の特徴や変化する経過に応じた援助の特徴を理解できる。
- ④周手術期・回復期にある対象の機能障害や検査・処置・治療に基本的ニーズの充足の変更を余儀なくされた対象に適した生活を整えることができる。
- ⑤回復期にある対象が治療により変化した機能障害に適応でき、より最適な生活ができるように生活修正及びセルフケア行動の獲得に向けた援助ができる。
- ⑥周手術期・回復期にある対象を生活者の観点からとらえ、機能障害に伴う生活の修正・適応並びに Quality of Lifeが高められるような看護過程の展開ができる。

(2) 実習方法

3週間の実習期間のうち、1週目の初日は学内日とし、実習直前オリエンテーションにて、事前学習の確認、看護技術演習、実習記録の記載方法を実施する。臨地実習は、2日目から開始し、病棟内オリエンテーション後に看護師のシャドーイング実習を実施する。3日目にICU・HCU実習を実施する。4日目から3週目まで、周手術期患者を受け持ち看護過程の展開を主とした実習を行う。

シャドーイング実習は、2病院の消化器外科を主とする4病棟を使用し、学生の実習目標（行動計画）を実習初日の学内日に確認し、学生の希望になるべく沿うように教員が臨地指導者とあらかじめ調整し、スタッフが受け持つ担当患者等を考慮しながら担当看護師と学生とをマッチングし、実施した。

(3) シャドーイング実習目標

- ①病棟の一日のスケジュールが理解できる。
- ②周手術期患者の特徴（治療・検査・処置）が理解できる。
- ③看護師が行う看護業務が理解でき、看護ケアと一緒に参加できる。
- ④病棟カンファレンスに看護チームの一員として、参加できる。

V. 倫理的配慮

本研究は、共立女子短期大学・大学倫理審査委員会承認（KWU-IRBA#12028）を受けた後、研究対象者には、成人看護学実習成績評価後に研究への協力・参加の有無は、自由意思に基づくものであること、また協力を拒否した場合でも、成績には全く影響が無いことその他、いかなる不利益が生じないこと及び結果は、調査以外の目的で用いないことを文書と口頭にて説明した。無記名での学びのレポートは提出をもって同意を得ることを説明した。

VI. 結果

1. シャドーイング実施者（除外基準を除いた）：

52名/79名

2. シャドーイング実施率：66%

3. シャドーイング実施日

1) 実習初日：96%

2) 受け持ち患者1例目の退院後：4%

学生の学びより、今回は、実習初日にシャドーイング実習を経験した者の結果に着目した。（表1）シャドーイング実習の学び及び実習後の受け持ち患者看護に活かせることは、6つのカテゴリ、23のサブカテゴリが抽出された。以下、カテゴリは、【 】で示し、サブカテゴリは〈 〉で示す。

6つのカテゴリは、【全体】【術前看護】【術当日看護】【術後看護】【チーム連携】【看護技術】からなる。23のサブカテゴリの【全体】では、〈個別性を重視した看護〉〈家族看護〉〈環境整備〉〈食事（配膳・下膳）〉〈与薬管理〉〈感染予防対策〉〈安全管理対策〉の7つのサブカテゴリから生成された。【術前看護】では、〈術前不安への援助〉〈入院時オリエンテーション〉〈術前オリエンテーション〉〈術前訓練〉の4つのサブカテゴリから生成された。【術当日看護】では、〈手術準備・移送〉〈手術室への申し送り〉〈術直後の観察〉の3つのサブカテゴリから生成された。【術後看護】では、〈術後の観察・ケア〉〈疼痛緩和ケア〉〈褥創予防ケア〉〈離床の援助〉の4つのサブカテゴリから生成された。【チーム連携】では、〈リハビリケア〉〈他職種連携〉の2つのサブカテゴリから生成された。【看護技術】では、〈コミュニケーション技術〉〈清潔ケア技術〉〈退院指導〉の3つのサブカテゴリから生成された。

4. シャドーイング実習の学び

カテゴリの【全体】からは、〈個別性を重視した看護〉では、術後せん妄リスク患者の首元にバンダ

ナを用いて、IVHラインの自己抜去を防止する工夫を確認でき、患者の個別的状況に合わせた看護の大切さを実感していた。〈家族看護〉では、患者の面会時に家族の不安を確認していた看護師の配慮から家族への支援方法を学んでいた。〈環境整備〉では、周手術期は健康の段階が日々変化するため、患者のその日のADLを考慮し、状況に合わせた環境整備をしなくては意味がないことを学んでいた。〈食事（配膳・下膳）〉では、配膳時に術後回復のための食事摂取方法の説明や下膳時で再度確認する大切さを学んでいた。〈与薬管理〉では、内服薬・点滴薬両方の与薬時のダブルチェック方法や患者の下でのリストバンドと薬剤の照合場面により、確認方法の重要性を学んでいた。〈感染予防対策〉では、患者の安全な医療の提供のために看護師が患者と自身を守るための手洗い・手指消毒剤の使用に関する意識と実際について学んでいた。〈安全管理対策〉では、日々変化する患者の健康段階に応じてベッド柵の設置、ベッドの高さ、ライン類の整理など患者の安全を守る看護を学んでいた。

【術前看護】からは、〈術前不安への援助〉では、術前の不安な思いを傾聴するための寄り添う看護の大切さを学んでいた。〈入院時オリエンテーション〉では、安心して患者が手術に臨むためには、入院環境を調整する必要性を学んでいた。〈術前オリエンテーション〉では、万全な体制で手術に臨むために術前日の病棟看護師・主治医・麻酔医・手術室看護師から説明の重要性を学んでいた。〈術前訓練〉では、入院前の訓練状況を確認し、術後合併症を予測した術前訓練の重要性を学んでいた。

【術当日看護】からは、〈手術準備・移送〉では、患者の身体的・精神的状況をふまえた安全な移送方法の選択と実際について学んでいた。〈手術室への申し送り〉では、緊張緩和の声かけと患者や手術部位の誤認防止などの安全を考慮した病棟から手術室への継続看護の重要性を学んでいた。〈術直後の観察〉では、術直後の適切な観察から正常・異常の判断を含めた術後アセスメント方法の実際を学んでいた。

【術後看護】からは、〈術後の観察・ケア〉では、術後合併症の好発時期に照らし合わせて、術後合併症を予測しながらの観察と迅速な対応を学んでいた。〈疼痛緩和ケア〉では、離床前のNRSスケールを用いた疼痛評価方法と疼痛緩和方法のケアの実際を学んでいた。〈褥創予防ケア〉では、褥創アセスメントをふまえた観察と褥創予防ケアの実際を学

表1 シャドーイング実習での学びとシャドーイング実習後に受け持ち患者看護に活かされたこと

カテゴリ	サブカテゴリ	コード：シャドーイング実習の学び	記述コード数	コード：シャドーイング実習後に受け持ち患者看護に活かされたこと	記述コード数	
【全体】	＜個別性を重視した看護＞	術後せん妄リスク患者の個別的状态に合わせた看護	8	患者の希望を確認しケアの計画ができた	5	
	＜家族看護＞	患者の面会時に不安を軽減するための家族看護	6	患者の面会時に家族の思いを確認し必要な支援ができた	4	
	＜環境整備＞	ADLに合わせた環境整備の重要性	36	患者のADLに合わせた環境を調整できた	35	
	＜食事（配膳・下膳）＞	術後回復に応じた食事摂取の必要性と再確認	5	配膳時に食事の必要性の説明をし下膳で再確認できた	5	
	＜与薬管理＞	与薬時のダブルチェック・確認方法	20	鎮痛薬の時間・適切な量を確認できた	12	
	＜感染予防対策＞	感染予防の看護師の意識と感染予防	25	手洗い・手指消毒剤の使用と口腔ケアの意識づけができた	22	
	＜安全管理対策＞	健康の段階に応じた安全を守る看護	20	患者の状況に応じた環境調整・歩行の援助ができた	18	
	＜術前不安への援助＞	術前不安を軽減するための寄り添う看護	18	手術前に家族との時間を調整し不安を表出しやすいように配慮できた	10	
	【術前看護】	＜入院時オリエンテーション＞	安心して手術に臨むための入院環境の調整方法	10	病棟のパンフレットを用いて実施できた	5
		＜術前オリエンテーション＞	万全な体制で手術に臨むための医療者からの術前説明方法	22	病棟のクリニカル・パスを用いて実施できた	5
＜術前訓練＞		術前訓練状況をふまえた術後合併症予測	15	術前訓練（呼吸訓練）の一部を再確認できた	11	
＜手術準備・移送＞		身体的・精神的状況をふまえた安全な移送方法の選択	10	術前訓練（呼吸訓練）の一部を再確認できた	8	
＜手術室への申し送り＞		緊張緩和の声かけと安全を考慮した継続看護	30	術当日の最終飲食時間・最終排泄状況の確認ができた	22	
【術後看護】	＜術直後の観察＞	術直後の観察をふまえた術後アセスメント方法	28	手術室で病棟からの申し送りを確認できた	19	
	＜術後の観察・ケア＞	術後合併症を予測した観察と迅速なケア	38	術後合併症を予測し看護師とともに観察できた	32	
	＜疼痛緩和ケア＞	離床前の疼痛評価方法と疼痛緩和ケア	32	疼痛評価方法と疼痛緩和ケアが実施できた	25	
【チーム連携】	＜褥瘡予防ケア＞	褥創アセスメントをふまえた褥創予防ケア	5	褥瘡アセスメントをふまえた体位交換の工夫が実施できた	3	
	＜離床の援助＞	患者の状態に合わせた離床の方法・タイミング	25	患者の状況に応じた段階をふまえて離床の援助の一部が実施できた	22	
	＜リハビリケア＞	看護師・理学療法士との協働によるリハビリの検討	8	理学療法士に相談して褥瘡リハビリメニューを考え実施できた	5	
	＜他職種連携＞	回復促進のための医療チームカンファレンス	15	他職種とのカンファレンスに参加し術後ケア・退院指導に活かされた	8	
【看護技術】	＜コミュニケーション技術＞	ケア時の会話による患者ニーズの確認方法	36	患者の精神面に配慮した声かけができた	24	
	＜清潔ケア技術＞	回復促進につながる褥瘡をふまえた清潔ケア	40	離床につながる褥瘡をふまえた清潔ケアの実施ができた	37	
	＜退院指導＞	退院後の生活を見据えた退院準備と患者指導方法	33	退院後の生活に即した退院指導パンフレットを作成し実施できた	24	

表2 周手術期看護実習をする上でのシャドーイング実習の意味

- ・実習病棟の雰囲気理解でき、実習初日の緊張感が軽減できた。
- ・周手術期実習は速い展開を求められるので、病棟の一日流れを把握できてよかった。
- ・担当の看護師さんから実習での学習方法のレクチャーをしてもらい、実習の進め方が理解できた。
- ・看護技術（観察・ケア）方法が未熟なため、看護師さんの看護技術を見学し、学べる機会が得られた。
- ・患者さんの術前の思いの引き出し方など、看護師さんの会話術を側で学べてよい経験ができた。
- ・面会時間に来た家族と看護師さんとの関わりで、家族看護の大切さを学べてよかった。
- ・看護師さんが複数術後患者を受け持ちながら効率よく看護をしていた場面で学べて勉強になった。
- ・シャドーイングが実習開始日にできるとその後の受け持ち看護に役立てたので意味があると思った。
- ・看護師さんと会話ができたことで、受け持ちでの担当時にスムーズに相談・報告ができた。
- ・2年目の看護師さんが担当だったが、一つ一つ確認しながら実施する大切さを教わることができた。
- ・看護師さんの看護観を確認する機会があり、このような看護師を目指したいと思った。

んでいた。《離床の援助》では、患者のその時の状況に応じた離床方法やタイミングの実際を学んでいた。

【チーム連携】からは、《リハビリケア》では、看護師と理学療法士の協働から病棟やベッドサイドで行うリハビリの検討と実際を学んでいた。《他職種連携》では、患者の回復促進には、医療チームカンファレンスでの意見交換の重要性を学んでいた。

【看護技術】からは、《コミュニケーション技術》では、患者へのケア時に看護師が患者のニーズを確認する方法から重要性を学んでいた。《清潔ケア技術》では、回復促進につながる根拠をふまえた術後の清潔ケアの方法と実際を学んでいた。《退院指導》では、退院後の生活を見据えた退院準備の必要性と患者指導方法を学んでいた。

5. シャドーイング実習後に受け持ち患者の看護に活かされたこと

カテゴリ【全体】からは、《個別性を重視した看護》では、一日の予定を立てる際に患者の希望に合わせてケアを計画することができた。《家族看護》では、患者の面会時に家族との時間をづくり、気持ちを確認し、医師や医療ソーシャルワーカー（MSW）につなげる支援ができた。《環境整備》では、周手術期は健康の段階が日々変化するため、患者のADLに合わせてその日の状況に合わせてナースコール、点滴スタンドの位置、車椅子の配置など環境整備することができた。《食事（配膳・下膳）》では、配膳時に術後食の摂取方法の説明と下膳時で食事量、食べ方の再確認ができた。《与薬管理》では、鎮痛薬を飲むタイミングや効果時間・適切量の確認ができた。《感染予防対策》では、患者への手洗い・手指消毒剤の適切な使用と口腔ケアの意識づけができた。《安全管理対策》では、日々変化する患者のADLや術後の体力に応じた環境調整と歩行の援助ができた。

【術前看護】からは、《術前不安への援助》では、緊張がピークに達している患者へ家族との時間を調整し、不安を表出しやすいように配慮できた。《入院時オリエンテーション》では、病棟のパンフレットを用いて、看護師と一緒に説明することができた。《術前オリエンテーション》では、病棟のクリニカル・パスを用いて、看護師と一緒に実施できた。《術前訓練》では、外来での呼吸訓練のパンフレットを用いて、再度訓練の再確認ができた。

【術当日看護】からは、《手術準備・移送》では、術当日の禁飲食を含めた最終飲食時間の確認と最終排泄状況を確認できた。《手術室への申し送り》では、手術室で病棟と手術室の申し送りを確認することができた。《術直後の観察》では、15分ごとの観察をするために全身の効率のよい観察方法を看護師とともに実施し、その後患者の状態のアセスメントを確認できた。

【術後看護】からは、《術後の観察・ケア》では、術後合併症を予測しながら看護師と一緒に観察ができた。《疼痛緩和ケア》では、離床前のNRSスケールを用いた疼痛評価方法と疼痛緩和のための呼吸法を説明できた。《褥創予防ケア》では、褥創アセスメントをふまえて安楽枕やバスタオルを用いた体位交換を実施できた。《離床の援助》では、患者のその時の状況に応じて床上運動、座位、起立と段階をふまえて離床の援助を実施できた。

【チーム連携】からは、《リハビリケア》では、理学療法士に相談し、病棟でのリハビリメニューを計画し、実施できた。《他職種連携》では、医療チームカンファレンスに参加でき、他職種の患者の捉え方や今後の方向性を理解でき、術後ケアや退院指導に活かされた。

【看護技術】からは、《コミュニケーション技術》では、患者の精神面に配慮した声かけができた。《清潔ケア技術》では、離床につながる回復促進の

根拠をふまえた術後の清潔ケアが実施できた。《退院指導》では、退院後の患者の目標を含めた、生活を見据えた退院指導パンフレットを作成し、実施できた。

6. 周手術期看護実習をする上でのシャドーイング実習経験の意味（表2）

周手術期看護実習でのシャドーイング実習導入に際して、学生からは肯定的な意見が多くみられた。

Ⅶ. 考察

1. シャドーイング実習での学びの分析

学生は緊張感をもって、周手術期看護実習に臨んでおり、中本らも臨地実習の場は学生にとって慣れない環境であることから緊張も高く、看護のリアリティにも直面するため、学生は実習における様々な困難を体験している¹⁵⁾と報告している。そのため、シャドーイング実習では、まず学生が、病棟の雰囲気慣れることから始まり、看護師とともに患者の下へ訪室し、直接看護師が行う患者との関わり方、看護ケアなどの看護実践場面を見学後、フィードバックを受けることで、緊張感の軽減につながり、病棟の流れや実習の学習方法を見直す機会が得られていた。これは、高比良らの学生の学習を促進する関わりとして、(1) 卓越した看護者のロールモデルがいる、(2) 看護師が学生を見守り、声をかけ誘導する、(3) 看護師の質問や指導により、学生が自分を客観視する機会となること¹⁶⁾に合致していたことが示された。

さらに、周手術期看護ならではの速い看護過程の展開は、学生にとって衝撃を受けることが少ないため、看護師とともにオリエンテーションや術前訓練を一部実施しながら学ぶ方法により、理解を深められたことにつながっていたと考える。

そして、術後患者の日々の変化に際し、看護師が行う観察を見学した後にフィードバックを受けることで、看護師がどのような意図で看護実践していたのか、患者の捉え方を含めたアセスメント方法の学習に活かすことができていた。これは、長田の「(シャドーイング実習)では、看護師のアセスメントや評価方法など非常に重要なことも学んでいる。」¹⁷⁾に相当すると考える。

こうした中、看護師が行う患者への看護技術の提供は、身体的ケアのみならず、周手術期ならではの術前不安のある患者への思いの引き出し方など精神的ケアでの看護支援方法も同時に学んでいたことが推察された。これらのシャドーイング実習から得た

学びは、より鮮明に印象に残る経験となり、その後の受け持ち患者への看護に活かすことへとつながったと考える。このことは、長田のシャドーイングの実施は、おおむね受け持ち患者の看護に効果的であると考えられ、看護計画の立案から評価に至るまで、看護過程の全般にわたってよい効果をもたらす可能性がある¹⁸⁾に合致していたと考える。そして全体を通して、よき看護師モデルを間近でみることにより、より一層看護師の志向性が高まり、必要な看護実践力を修得するための一助となっていたことが示唆された。

2. シャドーイング実習の今後の課題

金久保らは、看護基礎教育における看護実践能力について、看護技術の体験を取り扱っていたものが多かった¹⁹⁾と示している。また学生の看護技術は、李らが、近年では、医療の高度化、在院日数の短縮化により、臨地実習において看護学生が経験、実践できる内容は以前よりも限られている²⁰⁾ことを報告し、シャドーイング実習による受け持ち患者以外での看護技術の経験は非常に貴重な経験となっていることを示している。これは青木らが、成人看護実習において、看護師に同行する体験型実習を導入し、「受持患者の看護過程を展開する実習では学習機会が限られる治療法や健康問題を持って生活するという患者への看護体験」が得られる²¹⁾と合致しており、今後は、看護実践能力育成のために受け持ち患者の看護では学ぶことが難しい内容を中心に学生も看護チームの一員として、積極的にシャドーイング実習にて、看護師と一緒に学ぶ機会を得られる実習内容について検討していきたいと考える。

Ⅷ. 結論

1. 周手術期看護実習におけるシャドーイング実習の学びでは、学生は看護師が行っている看護実践場面を直接的に学ぶ機会が得られたことで、その後の受け持ち患者への看護に活かすことへとつながっていた。そして全体を通して、よき看護師モデルを間近でみることにより、より一層看護師の志向性が高まり、必要な看護実践力を習得するための一助となっていたことが示唆された。
2. シャドーイング実習の今後の課題は、看護実践能力育成のために受け持ち患者の看護では学ぶことが難しい内容を中心に学生も看護チームの一員として、積極的に看護師と一緒に学ぶ機会を得られる実習内容について検討していきたい

と考える。

IX. 研究の限界と今後への示唆

本研究では、3年課程の看護短期大学での周手術期看護実習におけるシャドーイング実習についての学びを明らかにしたものであり、全ての看護教育機関に在籍する学生の現象として一般化するには限界がある。今後他の教育機関とも連携を図り、データ数を増やして、一般化できるようにしていく必要があると考える。

謝辞

本研究にご協力していただきました皆様に心より感謝いたします。なお本研究は、第35回日本看護科学学会学術集会にて発表した²²⁾ものに一部加筆、修正を加えました。

引用文献

- 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書(2011)，(3) 効果的な臨地実習の方法
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/...att/2r98520000013l4m.pdf>
〔2019.5.26閲覧〕
- 守田稲子，伊東志乃，神田郁子他：急性期実習における学生の不安の実態調査：STAIによる実習前・手術前・実習後における不安要因について，*静岡県立大学短期大学部研究紀要*，15，125-134，2001.
- 沖野良枝，山口曜子，岸友里他：周手術期実習中の看護援助における学生のストレス認知と生理的反応との関連：唾液中クロモグラニンA (CgA)，コルチゾールによる検討，*人間看護学研究*，2，79-87，2005.
- 千田寛子，堀越政孝，武居明美他：成人看護学実習における看護学生の抱える困難感の分析，*群馬保健学紀要*，32，15-22，2012.
- 笠井恭子，高鳥真理子：基礎看護実習における学生の戸惑いの実態，*福井県立大学看護短期大学部編集*，9，75-82，1999.
- 萩原麻紀，河原田榮子：老年看護学実習における看護学生の「戸惑い」，*看護人材教育*3 (3)，140-144，2006.
- 目時まゆみ，佐藤和子：基礎看護学実習Ⅱにおける学生の困難感，*神奈川県立よこはま看護専門学校紀要*，4，1-6，2008.
- 鈴木のり子，高木文子：臨地実習での看護診断過程における学生の困難とその原因，*日本看護学教育学会誌*，12 (1)，11-17，2002.
- 中澤洋子，立石和子，原谷珠美他：成人看護学実習前後の学生の変化に関する研究「不安」「看護過程展開」「コンピテンシー」を中心に，*北海道文教大学研究紀要*，36，127-136，2012.
- 三枝香代子：成人看護実習における学生が体験する困難－卒業生のアンケート調査を基に－*千葉県立衛生短期大学紀要*，26 (1)，77-88，2007.
- 大坪明美，村上真須美，上泉和子：管理者研修へシャドーイングを活用する，*看護展望*，36 (2)，130-136，2010.
- 文部科学省：大学における看護実践能力の育成の充実に向けて看護学教育の在り方に関する検討会報告(2002)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401.htm
〔2019.5.26閲覧〕
- 佐居由美，大久保暢子，石本亜希子他：看護学導入プログラムにおけるシャドーイングアドバンスの試み，*聖路加看護大学紀要*，(34)，70-78，2008
- 高下智香子，常石光美：シャドーイングによる統合実習での学びの認識と指導者の指導の認識の実態，*中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌*，8，292-295，2013
- 中本明世，伊藤朗子，山本純子他：臨地実習における学生の困難感の特徴と実習状況による困難感の比較－基礎看護学実習と成人看護学実習の比較を通して－，*千里金蘭大学紀要*，12，123-134，2015.
- 高比良祥子，山田貴子，吉田恵理子他：看護学生が認知する術後観察場面での看護師の関り，*長崎県立大学看護栄養学部紀要*，15，1-9，2016.
- 長田艶子：周手術期実習におけるシャドーイングの実態調査－学生アンケートによる検討－，*日本看護学教育学会誌*，23 (1)，53-61，2013.
- 前掲書17)
- 金久保愛子，塚本尚子：看護基礎教育における看護実践能力の主体的取得に関する文献の検討，*上智大学総合人間学部紀要*，1，33-42，2015.
- 李慧瑛，下高原理恵，峰和冶他：主体的に学ぶ力を育成する実習方法の検討－経験型実習教育の現状と課題－，*鹿児島大学医学部保健学科紀*

要, 25 (1), 47-58, 2015.

21. 青木きよ子, 中島淑恵, 安井大輔他: 成人看護実習で実施している看護師同行実習における技術経験, 順天堂大学医療看護学部医療看護研究, 5 (1), 82-90, 2009.
22. 石渡智恵美, 菱刈美和子: 周手術期・回復期実習における看護実践能力の育成方法の検討3～シャドーイング実習の学びの分析～, 第35回日本看護科学学会学術集会(示説), 広島, 第35回日本看護科学学会学術集会講演集, 537, 2015.